

高校生は世界一 かっこいい存在だと思っ つんです。

写真家／小野 啓

まだ写真の専門学校生だったころから12年間で、600人の高校生を撮影してきました。以前は知人のつてを頼って撮影をお願いしていましたが、今は「あなたの写真を撮らせてくれませんか?」と自分のHPやツイッターで募集しています。撮影場所は応募してきた高校生が普段生活している馴染みのある場所と決めているので、これまで北海道から沖縄まで日本全国を巡ってきました。高校生を主体に撮影しているのですが、背景にはその土地の風景が写っています。全国各地で12年間かけて撮影したことで高校生と一緒に風景の変遷も記録できた。最初は意識していませんでしたが、高校生を撮り続けることで、今の日本を撮っていると実感するようになりました。

高校生と接して感じるのは、今の生活が何となく物足りないとか、毎日が今ひとつ楽しくないとか、本当の自分を押さえつけたまま生きているというような鬱屈した気持ちを多かれ少なかれ抱えているということです。みんなの前で出せない本当の自分を写真によって見いだしてほしいという気持ちがどこかにあるんじゃないかなと感じます。

一方で、ツイッターなどを使って応募してくる軽やかな行動力はすごいと思います。僕が高校生だったころは、撮影してほしいと思っても行動に移すことはできなかったと思うので。

高校時代のぼくはとにかくいろいろなことで悩んでいました。例えば将来のこと。写真には興味はあるけれど本当に写真家になれるのか、自信がもてず悶々としていました。抱えている悩みを本音で語り合える友達もいませんでしたしね。

今の高校生も、日々の生活で悩んでいたり、学校や家庭でうまくやれない人はどこにも居場所がなくなってしまう。それはつらいですね。だからそれら以外のもう一つの場所を作るとよいのではと思います。例えば、僕の撮影という空間が、ほんの短い時間ではあるけれど、学校でも家でもないもう一つの場所になっているように感じます。

ぼくが高校生の写真を撮りたいと強く思うのも、僕自身、高校生のときに鬱屈した気持ちを抱えていたからということも大きいでしょうね。どうしてもあのころの自分と彼らとを重ね合わせてしまう。しかし、何よりも、子どもでも大人でもない、その狭間でもがき、悩んでいる彼らは独特の強いエネルギーを発していて魅力的で、人として一番かっこいい存在だと素直に思うからなんです。



Kei Ono
小野 啓

おの・けい●1977年京都市生まれ。高校生のころから写真家にあこがれ、立命館大学経済学部卒業後、ビジュアルアーツ専門学校大阪写真学科へ入学。撮影の技術を本格的に学びつつ、在学中の2002年から全国の高校生のポートレートの撮影を開始。卒業後は生活の糧を得るため滋賀県の大学に就職。事務職員として働くかわら、休日に高校生の撮影を継続。2年後退職し写真家一本に。2013年、11年間の高校生ポートレートの集大成として写真集「NEW TEXT」(赤々舎)を上梓。「桐島、部活やめるってよ」「少女は卒業しない」(朝井リョウ/集英社)の装丁写真なども手がけている。